

「ベルリンファイル」



2013 (平成25)年7月13日鑑賞

賞<梅田ブルク7>

監督・脚本：リュ・スンワン

チョン・ジンス (韓国国家情報院の諜報員) / ハン・ソッキュ

ピョ・ジョンソン (“ゴースト”と呼ばれる北朝鮮の秘密諜報員) / ハ・ジョンウ

トン・ミョンス (冷酷な北朝鮮の保安監察員) / リュ・スンボム

リョン・ジョンヒ (ピョ・ジョンソンの妻、北朝鮮大使館通訳官) / チョン・ジヒョン

リ・ハクス (ベルリン駐在北朝鮮大使) / イ・ギョンヨン

2013年・韓国映画・120分

配給/ CJ Entertainment Japan

<ベルリンでは、今なおスパイの暗躍劇が・・・?>

『GOOD BYE LENIN! (グッバイ、レーニン!)』(03年) (『シネマルーム4』212頁参照)も、『善き人のためのソナタ』(06年) (『シネマルーム14』208頁参照)も、1989年に起きたベルリンの壁崩壊をテーマとした名作だった。他方、『寒い国から帰ったスパイ』(65年)は、まさに1950年代の「東西冷戦」の時期における、命を賭けた東西両スパイの暗躍を描いた名作だった。北朝鮮の金正日が急死したのは2011年12月だから、東西冷戦の時代から約60年を経ているが、ベルリンにある北朝鮮大使館では今なお『寒い国から帰ったスパイ』で見たようなスパイの暗躍劇が・・・?

パンフレットにある辺真一氏のコラム「暗躍する北朝鮮」によれば、北朝鮮は世界160数か国と国交を結んでいるが、大使館を相互設置している国は24か国。そのうちの1か国が、本作の舞台となったドイツだ。ベルリンの壁が崩れ、東独が崩壊するまではベルリンにある北朝鮮の大使館は、欧州では最大規模を誇っていたらしい。そして、そこでは私たちが新聞やTVニュースで見る、①北朝鮮とアラブとの関係、②北朝鮮とイスラエル、③北朝鮮とマカオ銀行等をめぐるさまざまな動きが、今なおリアルタイムで展開されているらしい。17年間も長期政権の座にあった金正日の時代はそれなりに安定していたが、三男・金正恩が後継者となった今、北朝鮮の内部が乱れ、さまざまな権力闘争が起きているであろうことは想像に難くない。そうすると、今なお北朝鮮との戦争が終結しておらず、「停戦状態」にある韓国が、韓国国家情報院を通じて北朝鮮の動きを注意深く見張っているのは当然だ。しかして、韓国国家情報院ベルリン支部に勤務している敏腕エージェントのチョン・ジンス (ハン・ソッキュ) が今、監視カメラのモニターで注視しているのは、一体ナニ・・・?

<平和ボケで内向き志向の日本人に、この状況の理解は?>

本作冒頭の見どころは、あたかもニュース映像のようなタッチで見せる、ゴーストと呼ばれる北朝鮮の秘密諜報員ピョ・ジョンソン (ハ・ジョンウ) とジンスとの激しいアクションだが、それはどんな状況下で、誰と誰が、何をやっている中で起きた出来事なの? 冒頭ベルリンの某高級ホテルで行われている武器取引は、ロシア人武器ブローカーのユーリを通して、北朝鮮から反帝国主義アラブ連盟のアシムとアブドルに新型ミサイルを売りつけようとしているものだ。韓国国家情報院ベルリン支部のジンスが、その状況を監視モニターで逐一注視し、取引成立のタイミングで部下たちを現場に強行突入させようとする目論んでいるのは立派なもの。弁護士の私の目で見ると、そんな現場での武器取引の契約はなかなかいい加減なもの(?)だが、そこに起きたジンスも想定していない事態は、イスラエルの情報機関モサドに属する男タガンが機やりに入れてきたことだ。

ブツが先? それともカネが先? そんな言い争いはこの種の「取引」の際にはよく問題になるが、互いに武器を携行し極度の緊張状態の中で行われている武器取引の席に、突如想定外の第三者が登場してくれば現場が混乱するのは当たり前。現場は激しい銃撃戦となり、数人の死者も出たが、そんな混乱の中でこの武器取引のキーマンになっている男をジンスたちが取り逃してしまったのは実に残念だ。それにしても、今までCIAやMI6のリストにも記録がなく、ゴーストと呼ばれているこの男は一体何者? そして、誰の指示で、どんな役割を? 平和ボケで内向き志向の日本人にはこんな冒頭の展開はなかなか理解できないだろうが、本作の面白さを味わうためには、是非その理解を!

<二重スパイは誰? ひょっとして俺の妻が・・・?>

韓国側からの視点でみると、武器取引の現場が混乱の中でゴーストをとり逃がしたのは実に残念だったが、この事態を北朝鮮側からの視点で見ると、極秘であったはずのアラブとの武器取引の情報が、なぜ韓国側やイスラエルの情報機関モサドに漏れていたの? それが一番の問題だ。そこで考えられるのはいわゆる「二重スパイ」の存在だが、ジョンソンが見回してみても二重スパイに該当しそうな奴は・・・? こんな風に二重スパイの存在を疑い始めたジョンソンに対して、ベルリン駐在北朝鮮大使のリ・ハクス (イ・ギョンヨン) からもたらされた情報は、平壤から派遣されてきた保安監察員トン・ミョンス (リュ・スンボム) が、ジョンソンの妻リョン・ジョンヒ (チョン・ジヒョン) が二重スパイだという有力な証拠を入手したというものだった。まさか俺の妻が、そんな・・・?

在ベルリン北朝鮮大使館に通訳官として勤めているジョンヒは、ハクスからドイツ経済協力・開発省次官ジークムントとの取引のために、人妻の身でありながらジークムントの「接待」を命じられると仕方なくそれに従っていたから、やっぱり北朝鮮の人権無視はひどいものだ。まさか、そんなことに嫌気がさして韓国側に亡命しようとしているわけではないだろうが、ハクスから妻の調査を命じられたジョンソンが妻の監視と尾行を続けていると、その行動にはいろいろと不審な点がある・・・。

他方、アメリカの同盟国である韓国は、鳩山総理、菅総理の登場以降、日本以上にアメリカとの同盟関係を強めているから、韓国国家情報院のジンスがCIAと密接に連絡を取り合っていたのは当然。そんな中、旧知のCIA局長マーティから「北朝鮮の何者かが国連を通じて亡命を要請した」という重大な情報をキャッチしたジンスは、直ちに亡命者の身柄の確保に乗り出したが、ホントにその亡命者はジョンソンの妻のジョンヒ? それとも・・・?

<第三の男リュ・スンボムのキャラとその怪演に注目!>

本作の「2枚看板」は、ゴーストと呼ばれる北朝鮮の大物スパイ、ピョ・ジョンソンを演ずるハ・ジョンウと、『シュリ』(99年)以来14年ぶりに韓国の国家諜報院要員を再び演ずるハン・ソッキュの2人。そして、それに花を添えるのが『猟奇的な彼女』(01年)で圧倒的な存在感を見せたチョン・ジヒョン (『シネマルーム4』132頁参照)だ。しかし本作では、ハ・ジョンウ、ハン・ソッキュに次ぐ「第三の男」で、北朝鮮保安監察員トン・ミョンスを演ずるリュ・スンボムのキャラとその怪演に注目!

人と言いつつことすら避けようとする今ドキの日本の若者の登場は、平和で安全な国ニッポンが70年近く続いてきたことの結果だが、1953年7月27日の朝鮮戦争の停戦(もっとも、韓国は「休戦」、北朝鮮は「勝利」)後、今日まで60年間も外国との戦いだけではなく、内なる戦いを続けてきた北朝鮮の若者が、ミョンスのようなキャラになるのはある意味当然・・・? ミョンスは北朝鮮人民軍中將トン・ジュンホの息子だからもともと毛並みはいいわけだが、ストーリーが進行するにつれて冒頭に見た武器取引の混乱も、二重スパイの疑惑もすべてベルリンの大使館の実権を乗っ取るべく企むミョンスの策略だったことが明らかになってくるから、その展開を注意深く見守りたい。表面上はジョンソンのことを「冗貴」と慕っているミョンスが、二重スパイ容疑を仕組むためにジョンソンとジョンヒ夫婦が住む部屋の中に盗聴器を仕掛けたのは当然だが、さてその場所は? さらに常にジョンヒの行動を監視するためには盗聴器をジョンヒが常に身に付けるものに仕込む必要があるが、さてその場所は・・・? 今ドキの平和で安全な日本人には思いもつかないような人間監視のための盗聴システムについても、本作を観ながらしっかりと勉強したい。

ミョンスを演ずるリュ・スンボムはリュ・スンワンの実の弟で『クライング・フリスト』(05年) (『シネマルーム10』274頁参照) 等々に出演している韓国を代表する個性派俳優だから本作の怪演は当然かもしれないが、本作のクライマックスで見せるジョンソンとの死闘を含め、そのキャラと怪演に注目!

<「転向」というのは嫌な言葉だが・・・>

7月21日に実施された参議院議員選挙は自公の大勝利に終わったが、各テレビ局の開票速報と選挙特番を見ていると、日本がいかにも自由な国で、なんでも自由に発言できる国であるかがよくわかる。毎日放送(MBS)における関口宏キャスターの質問を聞いていると、自分の価値感に基づいた嫌味な質問ばかりだったが、そんな質問でも堂々とまかり通るのだから。それと対比するまでもなく、本作を観ていると、あれほど祖国・北朝鮮のために諜報員として尽くしながら、今は自宅に盗聴器を仕掛けられ、妻のジョンヒに二重スパイの容疑をかけられて苦悶するジョンソンの姿を見ていると、実に痛々しい。

本国からなぜミョンスがやってきたのかについてもジョンソンが十分わからなかったのも当然だが、自分と妻のジョンヒがミョンスによる邪悪な陰謀の中にはめ込まれていることを悟ると、彼の祖国への怒りと絶望は・・・? 他方、ジンスのほうも、あの日の失敗によって、韓国国家情報院の中で孤立する中、後輩のカン部長が出世していくサマをみていると、韓国国家情報院という組織の官僚主義的体質に徐々に嫌気が・・・。目下、ジンスがターゲットとして追うのは、あの日取り逃がした北朝鮮の「ゴースト」だが、そのゴーストが必死で妻のジョンヒと共にミョンスの追跡から逃れようとしている姿を見ると・・・。

北朝鮮が金正日から金正恩政権に代わっていく中、北朝鮮の秘密の銀行口座のありかのカギを握っているのは誰? 今の日本人には到底想定もできない複雑なからくりの中、ミョンスの手から逃れようとするジョンソンと、そのジョンソンを追おうとするジンスの立場が微妙に重なってくるサマが、本作中盤のハイライトだ。そして、そんな中でのジョンソンとジンスの何回目かの「出会い」の中で、はじめてジョンソンの口から「転向」という言葉が出されるが、私はこの言葉の持つイメージが大嫌い。しかし、自分だけは何とか脱出できたものの、愛する妻ジョンヒはなおミョンスの手のうちにあるジョンソンの立場をよくよく考えてみると・・・。

<クライマックスは怒涛のアクションの中で・・・>

本作はベルリンにある北朝鮮大使館を舞台として展開される、スパイとスパイの騙し合いであるうえ、アメリカのCIA、ロシアの武器ブローカーだけではなく、反帝国主義アラブ連盟のテロリストやイスラエル情報局モサドという、日本人にはまったく馴染みのない組織が絡んでくる。さらに、2011年に起きた、北朝鮮での金正日から金正恩への政権移譲という歴史的事実を前提としているから、それに伴う北朝鮮内部での権力闘争のサマが北朝鮮保安監察員ミョンスの動きの中で少しずつ見えてくる。その中で明らかになるのが、一方ではミョンスによる在ベルリン北朝鮮大使館乗っ取り計画であり、他方では、ジンスによる北朝鮮が持っている秘密口座のありかの追及だ。ミョンスは冒頭に見た武器取引の一方当事者である反帝国主義アラブ連盟の協力者だが、ジョンソンにその本性を見破られた後はジョンソンの抹殺に執念を燃やしていた。他方、ジョンソンの方は、妻ジョンヒがミョンスと反帝国主義アラブ連盟のもとでテロリストたちに監禁されているのだから、これを取り戻そうと必死になっていたのは当然。そこで、ジョンソンの「転向」を条件として成立したのが、ジョンソンとジンスとの「にわか連合軍」だが、たった2人でいかにしてジョンヒの奪回を?

ミョンスと反帝国主義アラブ連盟のテロリストたちはジョンヒを人質としたうえで、大量の武器を持ってジョンソンとジンスの襲来に備えていたから、そんな草原の隠れ家にまともに向かっていたのでは、ジョンソンとジンスの「にわか連合軍」が不利なことは当然。さあ、そこで2人が立てた作戦とは?

日本と違って徴兵制度がある韓国では、これまで横行していた(?) 韓流スターへの「特別扱い」を廃止するというニュースが最近流れていたが、本作に見る若手イケメン韓流スター、ハ・ジョンウのアクションや、小柄ながらシャープなアクションが持ち味のリュ・スンボムの身体の動きを見ていると、さすが徴兵制度で鍛え上げた韓国の若者だと感心させられる。派手に銃をぶっ放すアクションもいいが、本作のクライマックスで見ると、同じ北朝鮮のスパイながら、今は完全に敵対してしまったジョンソンとミョンスの格闘アクションは見どころいっぱいだ。この怒涛のアクションの中で展開されるクライマックスとその結末も、平和ボケした今の日本人にはなかなか想定できないものだから、その展開にも十分注目したい。